週刊ＲＯ通信

――２００５年――

2005.1-2005.12　No.539-No.596

奥井　禮喜

有限会社ライフビジョン

週刊ＲＯ通信　２００５年（2005. 1-2005. 12）

目次

普通に生きる意味 …… 6
いささかの感傷 …… 10
元気パーティーの勧め …… 14
報道と政治の緊張関係 …… 18
孟子の読み方 …… 22
春闘の考え方 …… 26
丁寧な仕事 …… 30
ゆとりなき思考 …… 34
すっとこどっこい …… 38
年金問題の論議 …… 42
資本・経営・労働 …… 46
ある卒業式 …… 50

日韓意識ギャップの行方 …… 54
All Fools' Day か All Days' Fool か …… 58
晩鐘 …… 62
理想と現実 …… 66
原因説と結果説 …… 70
何も解決していない …… 74
丁寧に働く …… 78
報道か、バッシングか …… 82
組織体質ということ …… 86
現代人の欠陥的側面 …… 90
公共放送への疑問 …… 94
言葉の技術・政治家の資質 …… 98
教育改革の方向 …… 102
今、気になること二〇〇五—企業社会編 106
プロ野球テレビ観戦考 …… 110

議会政治……114
友人からの手紙に……118
女の元気・男の元気……122
労使対等について……126
立法府の見識いかに……130
終戦にあらず、敗戦である……138
熟慮の時が来た……142
郵政民営化・議論をやり直せ……146
郵政民営化と外交事情……150
無関心層の系譜と課題……154
マキアヴェリズムの亡霊……158
政党に胡坐をかかさぬが一番……166
祭りはお仕舞い……170
圧倒的多数の自縛……174
「しがらみ」の錯覚……178

良夫賢父主義！……182
二〇〇七年問題とは何か……186
組合は働く現場を重視せよ……190
マスコミ不信と民主主義……194
焦るな！民主党……198
自衛隊は誇り高き継子であれ……202
外国訪問……206
人事管理の再生へ……210
外交下手の意味……214
きちんとした仕事をしよう……218
メディアとは何か……222
恒例年末パーティ……226
公について考えた……230
保守本流というところか……234
あとがき……239

No.五三九

普通に生きる意味

いつの頃からか新年と言ってもたいした感興が沸かない。それもそのはずで、時間に区切りをつけたのは人間の浅知恵なのであって、毎日が新年であり、毎日が晦日である。などとうそぶくのもわざとらしく、ここは世間並みに嬉しい心地で新年を迎えたらどうやという声も聞こえる次第で。

ところがこの年末年始ときたら新年早々に開催されるセミナー参加者ざっと四〇人の方々に、事前に拙著お読みいただきいろんな感想・意見・質問などちょうだいしているので、お一人ひとりにコメントを書かなければならない。仕事としては面白いのであるが、肉体労働でもあってだいぶくたびれた。

くたびれたのだが、おおいに勉強になった。たとえば「働く」ということを巡ってさまざまな悩み・葛藤がある。単純な話、「ちょっと、こういう具合にすればどうかな」という職場の隣同士の会話が容易にできにくい。これ、全国の職場の事情と言っても構わないのではなかろうか。

皆さまは誠に会社思いである。間違っても、こんな会社どうでもなれなんてことはお考えにならない。ならば、隣の人と、その隣の人と同じ思いが伝わりそうなものなのだが、そうはならないのが奇妙である。いったい、誰が会社を作っているのだろうか、とふと考えさせられる。

一九八〇年代、エズラ・ボーゲルの「ジャパン・アズ・ナンバーワン」がベストセラーになっていた頃、わが産業界では大企業病が問題視され、「活性化」という言葉が流行していた。しかし、問題の本質を抉り出す努力が不十分であった。本質とは官僚主義である。

組織は効率化するために、上意下達の仕組みを作っているが、それが絶対的上下関係になってしまってはいけない。指示・命令による縦社会関係が牢固としたものになってはいけないことくらいは、誰もが先刻承知のはずである。にもかかわらず、官僚主義が蔓延している。敵は官僚主義にありだ。

コミュニケーションがよろしくない。一緒に仕事している仲間同士が気軽に話せない。なぜかは知らぬが信頼感がない。しかし、付き合わずして信頼感が育つ訳はないから、コミュニケーションが大切だと思うのだけれど、信頼感が薄いからコミュニケーション

できないという堂々巡りである。

ひょっとすると現代の日本人は、自分の実力だけで生きているという幻想に囚われてしまっているのではなかろうか。歴史的にも、現代だけで見ても、現代人は巨大な社会的システムに拠って快適な暮らしを手にできているのだけれど、その当たり前のことを忘れてしまっているのではなかろうか。

現代の社会システムは人間の仕事を壮大な協働のプロセスにしたことで成立している。人間生活は社会システムそのものであり、現代人はその恩恵を授かっていると同時に、それを円滑・効果的に回転させねばならないという大きな課題をも担っている。

仕事は生活の糧であると大部分の人は言う。しかし、仕事が単に日々の糧だけでいいのであれば、あちこちから聞こえてくる職場の悩み・葛藤などは存在しないに違いない。多くの人々が自分の仕事に意味を感じたがっているからこそさまざまな軋みが目立つのである。

仕事のシステム、小さく言えば隣との関係は自分が構築するものだ。昔の職場ではちょっとした口論、喧嘩がしばしば見られた。今はない。「面白くない奴には一発お見舞いしてやりたい。しかし、システムは殴れない」という矛盾に自ら閉じこもっている

ようでもある。

誰もが大きな望みを持ち、それが叶えられないから不満の虜になっている訳ではない。多分、「あなたにとって幸福とは何ですか？」と問えば、直ぐに答えられる人は少ない。高望みしているのではない。ただ普通に生きられればいいと願っているだけなのであろう。

しかし、どうやらこの辺りにもう一つのヒントがありそうだ。つまり「普通に生きるには、普通以上の夢が必要だ」ということ。なぜなら、普通そのものには夢が存在していないからである。「職場をよくしたい」という思いは多分職場だけに留まらない。普通以上の夢の一つに違いない。

善男善女は家内安全・無病息災を願って近所の鎮守様へ詣でられる。その思いが社会化される時、元気の芽が吹くのでありましょうね。

2005. 1. 3

No.五四〇

いささかの感傷

私がかつて所属した職場では二六年に渡って同窓会が継続開催されている。毎年成人の日、工場近くの酒場で五〇人くらい集まって談論風発、和気藹々の懇親が繰り広げられている。多分こんな職場は日本全国探してもなかなか見つからないであろう。

一九六三年ケネディ大統領暗殺のニュースを太平洋のこちらで初めて受信した衛星通信・高萩ＫＤＤアンテナを開発された方々は当時二〇代の青年であった。「このアンテナは二〇代の若者が創りました」というコピーをつけた新聞広告が一頁を飾った。その青年たちも今は六〇代後半、ＯＢになられた。

わが職場の皆さまは赫々たる成果を残された。富士山レーダー、野辺山四五ｍΦ大口径電波望遠鏡、六四ｍΦハレー彗星探索大口径アンテナ、世界各国に衛星通信の大口径アンテナを造り、さらには世界一のハワイ・すばる望遠鏡も製作され、それはこれから一〇年後には宇宙外宇宙探索のアンテナへと大きな夢をつないでいる。

彼方へ行かれた方々もある。ハイテク最前線のユニークな職場を牽引して数々の作品

を残し、後輩から「鬼」と慕われた総帥の森川さんも亡くなった。私の高卒同期生は三人、一人は四〇歳で、もう一人は五〇歳で彼方へ旅立ってしまった。残ったのはおちこぼれた自分だけである。

「篩にかける」という言葉がある。篩にかけて残るのは役立たずのゴミだ。ゴミだから自分が残ったと思うと何やら切なくもなるけれど、そこは極楽トンボのこと、まだ何か可能性があるから残されていると思うようにしている。そうではあるが、なかなか自分のジャンルで手柄が出せないのが悔しい。

私が人生設計セミナーをわが国最初に開発したとして世間を騒がせたのはもう三〇年近く前になる。その後人生設計セミナー市場は一つの立派な研修市場として発展した。しかし、人生設計というにはいかにも羊頭狗肉のプログラムが主流になっている。わがエンジンの小ささは如何ともしがたい。

ま、それはともかく、職場の同窓会がどうして四半世紀にも渡って続くのであろうか。長く続く同窓会では戦友会がある。それに比較すれば、わが職場は戦友たちが共感し共有したのと同じような体験を確保したからではなかろうか。「働く」という意味の深さをしみじみ考えさせられる。

それは大げさでなく、やはり一つの戦争だった。まったくの新製品開発、図面通りに製品が完成したとしても、スイッチを入れて本当に稼動するかどうか確かめるまでは保障の限りできない。皆さまが歩かれた跡にしか道ができない。ロマンチックな表現ではあるがよほどの胆力を必要とする。

開発・設計もおおいに大変だが、その仕事が終われば次の仕事はない。総帥はじめ職場のリーダー方は席の暖まる暇もあらばこその具合で、世界中を駆け回って受注活動に奔走されていた。だから、職場は常に人手不足状態であって、皆が背伸びして挑戦しておられた。カイゼン方式そのものである。

哲学者・林達夫氏がルネッサンスの特徴を「アカデミア・アトリエ・マニュファクチャリング」と喝破されたが、まさしくわが職場はその通りであった。アカデミックな課題との格闘、実験室の趣き、人間同士の本音の格闘の日々が懐かしく想起される。

遊ぶのもおおいに遊んだ。大プロジェクトの一部の図面が現場へ出ると出図祝いと称してグループ単位の飲み会をやる。いや、残業が遅くなるとご苦労さんと称して飲み、失敗があればドンマイのために飲む。二日酔いなんてのはさして珍しい出来事ではなかった。

年一度の職場旅行会などは大変な楽しみ。総帥以下ほぼ全員が二泊三日の旅行に嬉々として出発する。休日に普通のおんぼろ自転車で尼崎から奈良まで日帰りサイクリングしたこともある。残業時間、即席めんごった煮の味は大好評であった。

わが同窓会はともかくとして、かつての日本産業界には、このような職場生活がごろごろしていたのではなかっただろうか。昨今の会社生活が面白くないのは、ひょっとすると皆さま妙に「ゆとり」があり過ぎて、退屈の虫封じに苦労なさっているのかも知れないなあ。「戦争に生きて平和に死す」という言葉もある。同窓会への車中にて。

2005. 1. 10（月）

No.五四一

元気パーティーの勧め

今年も恒例になった新春パーティーに参加させていただいた。主催実行委員会は情報労連群馬県協議会、ＮＴＴ労働組合群馬県グループ連絡協議会（田島和雄委員長）である。元気な活動を展開している組合が多くはない昨今、同組合の活動は特筆に価するので、今年も一言。

組合の新春パーティーと言えば旗開き、連帯の象徴である旗の前で新しい一年の決心を固めるのがならいであるが、最近は活動不振のせいもあってさほど活発には行われていない。同労組を支えるスピリッツは「義侠心」「やったろやないか」精神。さて。

賃上げがなかなかできないのであれば、名目にこだわらず実質生活に注目する。かつて賃上げと言えば英語になり季語になったほど、それが昨今は鳴かず飛ばず。そのエネルギーはやはり組合員が「欲しいっ」と絶叫したからであって、換言すれば、たいした賃上げしなくても何とかやれる時代になったとも考えられる。

もちろん、そこそこやれるとは言うものの、職場は元気が少ないし、コミュニケー

ションもよろしくない。マネジメントなんて言葉も下手すりゃ、そんな言葉は何を意味するのかいと言われるかも知れない。個人は実在するが組織は仮有である。どんな大きな組織であろうと、個人と組織を結び付ける努力をさぼってしまえば組織力など発揮できる訳がない。

わが国は民主主義社会の看板を背負っているけれど、選挙ともなれば半分はすいすい棄権なさって、あっけらかん。「私が関わったって何が変わるものか」とうそぶいておられる方々が少なくない。政治家の質が上がる訳がない。

そこそこやれると考えている間にたとえば貯蓄率はかつての一五％から六％に下がってしまった。金融危機を煽って、不良債権処理は見事にできたらしいが、個人金融資産になるはずであった一〇〇兆円近いお金が、銀行の利ざやに回り、もって家計部門から企業部門へ白昼堂々の所得転移が行われた。

不動産を除いて一・一億円以上金融資産保有者が一三二万人もおられて、世界シェア一七％、さすが世界一のお金持ちである。そして家計所得の四分の三は四分の一の世帯が保有なさるようになった。わが国内における所得格差はどんどん拡大傾向にある。

「国民はその程度に応じた政治しか手にできない」（トーマス・マン）という名言あり、

このような言葉が現実化する国情思えばいささか腹立たしい。いずれにせよ、一人ひとりがきちんと物事を考え、今何をなすべきかの精神を発揮しなくちゃならぬ。

話が回り過ぎた。同組合の今年のパーティーは新潟とスマトラ津波被災者への支援カンパを柱に据え、地域の活動家諸兄集まられ、災い転じて福となそうの意気で開催された。

会場は会社保養宿泊施設の一部を使い、何から何まで手作りの楽しさ。玄関前庭にはテント張り無国籍立ち飲み風しつらえ。メインセンター和室にはヒマラヤ岩塩オブジェが注連縄でつないだ夫婦岩風にでんと置かれて、エキゾチックな肌色に輝き、マイナスイオンがじゃんじゃん出ているそうな。赤提灯好きの退職者先輩諸兄には昔懐かしい酒場が作られている。

魚はもちろん日本海超特大舟盛り、鮭の三平汁、イカの丸焼き、紅ずわい蟹、鰯丸干し、鮭ハラス、小千谷蕎麦、酒は久保田、景虎、越の寒中梅その他、コシヒカリのおにぎりetc。新潟被災者支援活動の合間に現地調達してきた美味珍味の数々。焼き物は手作りの木炭にて。

一五時開会、おりから氷雨しょぼつくけれど、なんのその元気はつらつ。前委員長・

儘田勉氏が、阪神大震災後、全国的自粛ブームの軟弱を見て、神戸で落ちたＧＤＰをこっちで取り返し、いささかなりとも連帯の元気を贈ろうと、高崎→長野善光寺一二〇km／二四時間ウォークを挙行、以来ウォーキング行事も恒例となった。中国、モンゴルの砂漠化対策植林も営々継続中。

主催者の思いは参加者をおおいに奮い立たせたでありましょう。日々無事息災・家内安全だけを願ってちんまりするだけではなく、大衆社会を担う一人として少しでも社会のために貢献したいという思いの強さを今年もまたしみじみ味わったのであります。関係者の皆さまに感謝。

2005. 1. 17（月）

No.五四二

報道と政治の緊張関係

どうもよく分からないところばかりなのだけれど、例のＮＨＫ番組改変問題に関してやはり一言述べたい。要約すると事件は次の通りである。

――朝日新聞が一月一二日朝刊で、旧日本軍従軍慰安婦制度の責任者を裁く民衆法廷を扱ったＮＨＫ報道番組を巡って、中川昭一経産相、安倍晋三自民党幹事長代理が放送前にＮＨＫ幹部に内容の偏向を指摘し、ＮＨＫが番組内容を変えて放送したことを報道した。番組デスクは昨年末、「政治介入を許した」として内部告発していた。

ところが、朝日記者の取材に対して「圧力とは感じた」と述べた松尾武元ＮＨＫ放送局長が一月一九日記者会見では「圧力を感じていないと答えた」などと発言を翻し、ＮＨＫが朝日新聞社に記事の訂正と謝罪を求めたが、朝日新聞社はＮＨＫの「虚偽報道」などとする報道に抗議している。中川、安倍両氏は「圧力をかけていない」と、朝日報道を否定している。――（以上はアサヒコムから）

私はその番組を見ていないし、どの程度の改変があったのかももちろん知らない。

まったく蚊帳の外ではあるのだが、報道の自由を高らかに唱えているわが国において、どんな形にせよ、検閲的、あるいは政治家とＮＨＫの馴れ合い的関係があるのは好ましくない。

しかし、事実が白日の下に出されていないのだから、隔靴掻痒の感じを免れない。松尾元放送局長と取材した朝日記者二人において、「言うた・言わない」関係になっているらしいことは分かる。

さらに朝日新聞社は、ＮＨＫが本件に関して「朝日新聞虚偽報道問題」という表題で放送したことなどから、公共放送たるＮＨＫが長時間に渡る自己弁護に終始する放送をしたのは放送法に照らして重大な疑問であると、怒る。こうなると朝日とＮＨＫの喧嘩みたいな形なのである。

一方、安倍氏は「公正・中立の立場で報道すべきではないかと指摘した」とコメントした。これはしかし十分に政治家的圧力発言とみなされる。安倍氏のやや甘いマスクにミーハーしておられる方々ならいざ知らず、氏が自民党において、いわゆる硬派であるのを知る人としては、氏が政治的に中立的・公正的な方であると考える訳にはいかないだろう。

その意味ではいささか軽薄である。さらに同番組が「拉致問題に対する沈静化を図り北朝鮮が被害者としての立場をアピールする工作宣伝活動の一翼も担っていると睨んでいた。」とし、「北朝鮮問題への取り組みをはじめとし、誹謗中傷にあってきたが、私は負けない。」などとポーズを取られると、私には、氏がすり替え、逆手に取った宣伝をしているように見える。

さて。本問題に関して、目下事実は間違いなく藪の中なのである。朝日新聞の論調が嫌いな方々も少なくないであろう。その好き嫌いはちょっと脇へ置いていただいて、本問題が提起した意義を考えてみたい。

少なくとも朝日は民間企業であり、思想的に、あるいは報道が捏造であったりすれば当然社会的指弾をうけるのだから、本問題に関しては報道の自由という観点から迫ったのだと思う。その姿勢は今後ももっと大胆にやってほしい。それがいささかヤワになっているのじゃないかと私は危惧している。

一方のＮＨＫに関しては、「李下に冠を正さず」の姿勢が十分なのであるかどうか。予算問題があるから政治家に面会したり、打ち合わせしたりすることがあるのは当然であるが、そうであるからこそ、必要以上に政治家との関係に関しては注意しなければなら

ない。

いずれにせよ、ＮＨＫが公正・中立の報道と商売との関係で苦労しているであろうことは理解できる。まして昨今は不祥事が続いて、かなりダメージが大きいだろうから。なにゆえ、そんな事態になったのであろうか。公共放送と言うならば、ＮＨＫのスポンサーは国民である。仮に政治家が圧力をかけてきたとしても、きちんとしたいい番組を提供しているのであれば、国民はＮＨＫを支持して、不埒な政治家の言い分など吹き飛ぶのではあるまいか。

そしてもう一つ。ジャーナリズムと政治との関係について、本件はなかなかいい問題を提起している。ジャーナリズムと政治との間には絶えざる緊張感が必要だという、もっとも大切な問題を浮かび上がらせたのである。

2005. 1. 24（月）

No.五四三

孟子の読み方

孟子（前372―前289）という人は、その性誠に善にして、人間の善なること、各人の真摯・真剣な人間としての成長努力に大いなる期待を寄せた人らしい。孔子を尊敬し、その教育者・啓蒙者たる偉業を発展させるべく尽力したのである。譬えて説明することが得意で、分かりやすかったという。

文字にとらわれて句の意味を理解し損ねてはならない。句にこだわって全体の意味を理解できないのもダメだ。いわゆる「論語読みの論語知らず」になってはいけないとおっしゃる。ごもっともである。

ところで孟子が一貫して説いて止まなかったのは、要するに「仁」に生きよという一事に尽きる。とりわけ権力者に対しては、為政に当たっては、一人よがりになるな、徳によって治めよと口をすっぱくして語っている。

梁・恵王が「自分はあらん限りの苦心をして人民のために尽くしているのに敬慕する人民が増えない」とぼやく。孟子は「まず人民の生活を安定させよ。これが王道政治の

端緒である。」「人民が餓死しても自分のせいではない、凶作のせいであるとすましておられるが、自分の政治が悪いからだと責任を自覚なさい。そうすれば天下人民は王様を敬慕するでしょう。」と見事に痛烈な意見をやってのけた。

「棍棒で殴り殺すのと、刃物で切り殺すのと違いがありますか。」「殺すことに違いはない。」「刃物で切り殺すのと、政治が悪くて死に追いやるのとではいかがか。」「同じである。」「王様の調理場には丸まる肥えたうまそうな肉があり、人民は飢えて青ざめています。王様は人民の父母たりえますか。」

斉・宣王に対しては「庶民は恒産を失えば恒心はないものです。わがまま・ひがみ・よこしま・ぜいたくなど、人はしたい放題、どんなことでもやってのけます。それを知っていながら何もせず、いざ罪を犯せばびしびし処罰する。それこそ人民を無視するというものです。」

孟子が説いた帝王学は、徹底的に人徳を施せ、そのために人民に温かい視線を降り注げというものである。

「国君が政治をとることはさほど難しいことではない。まず自分の身を正して譜代の重臣たちから恨みや怒りを受けるようなことをしなければそれでよい。重臣たちが心か

ら敬慕すれば、やがて一国の人々も敬慕するようになり、一国の人が挙って敬慕すれば、やがては天下の人もみな敬慕して振幅するようになる。」とてもとても変人、奇抜な論理ではない。

孟子は遥か大昔の中国の思想家である。その言葉がそのまま通用するとはもちろん考えない。大事なことは孟子も言うているように、彼の思想がどの辺に焦点を当てているかを斟酌し、理解しなければなるまい。部分的に都合のよろしいところを引用して悦に入るのは曲学阿世の輩がやることだ。

舜は農夫から身を起こしてついに天子になった。殷・武丁の賢相（宰相）と言われた傅説（ふえつ）は徒刑囚の土木工事人夫であった。彼らの数奇に富んだ生涯を引き合いにして、孟子は言う。「天の将に大任をこの人に降さんとするや、必ずまずその心志を苦しめ、その筋骨を労せしむ」云々。

「天が重大な任務を人に与えようとする時はまずその人の精神を苦しめ、筋骨を疲れさせ」の意味だが、さらに肉体を飢え苦しませ、やることなすこと失敗させて、意図と食い違うようにさせるものだ。発奮させ、辛抱強くさせ、大事業に成功する貴い試練であると続く。

わが首相は孟子の「天が重大な任務」云々を引用され、さらには凶弾に襲われた浜口雄幸へつなぎ不退転の決意を語った。しかし孟子全体を少し丁寧に読むと、孟子の帝王学は極めて仁徳を強調し、人間的に尽力するべきとの教育論にこそ本旨があり、英雄主義的なものではない。

言葉を引用するのであれば、いかに大昔の他国の方であろうとも、その全体を流れる論旨を大切にしなくてはなるまい。孔子も、孔子を慕う孟子も、稀代の教育者であった。少なくとも、彼らの論旨は人間たる存在が学んで成長するべきであると高らかに唱えているのである。

かつて中国では儒教が権力の代弁だとして厳しく指弾された。それは儒教が権力に擦り寄ったのではなく、権力がご都合主義的に使ったからだと、私は最近もまたしみじみ思っている。

2005.1.31（月）

No.五四四

春闘の考え方

春闘である。

日本経団連の考え方は――①景気回復の兆しを見せているが企業も働く人も実感できない。抜本的改善策が見出せない。デフレが一〇年近く続いている。失業率が四％台で高止まりしている。不安である。②国際競争力低下・少子高齢化で、おまけに社会保障制度へ不信感も募っている。③春闘は終わった。春闘はパターンセッターの作った相場を普及させる横並びである。企業業績・生産性格差が大きい。企業にとっては付加価値をいかに引き上げるかが最大課題である。④そこで今次春闘において考えるべきことは人事管理の在り方、今後労使は何を協議すべきか。「春討」時代である。――

要するに、依然として経済は厳しいから賃金は総額人件費と支払能力以内に納めるべきで、とてもじゃないが賃上げなど考えられないという企業にとっての賃金コスト論、「ない袖は振れない」という旧態依然のパターンである。

企業にとって賃金は間違いなくコストである。しかし、コスト論だけで賃金を論ずるのは公平・公正を欠く。なぜならば勤め人にとって賃金は「生活の糧」であり、「労働力の再生産費」であり、「所得」という重大不可欠な側面があることを忘れていただいては困るのである。

まだ春闘が元気だった当時、交渉において、経営側は不況になると忽然高飛車になって「会社がどうなってもいいのか」と威勢がよかった。組合側は物価が上がって生活が苦しくなると元気づいた。妙な話ではあるけれど。

不況で会社が苦しいのであれば、「すんません、もう少し元気になるまでがまんして協力してくれませんか」とお願いするのがスジではあるまいか。経営側の高飛車は春闘活況時代とまったく変わらない。ここには、バブル経営、それ以後、経営の打つ手がよろしくなかったという反省が見られない。以下いくつかの文句を言っておきたい。

①抜本的改善策が見出せない最大の理由は一九九〇年代半ば以降、リストラとは名ばかりのコスト削減策・減量経営が長過ぎたのである。

②不安を煽り立てたのはいったい誰か。危機を煽って、社内風土をもの言わぬ方向へ押し込んだのはいったい誰か。少なくとも従業員ではない。

③「失われた一〇年」ではなくて、「失われた二〇年」である。一九八〇年代半ばからの企業の人事管理は戦後最大規模で緩んでいた。

④企業の付加価値が上がらないのは、賃金のせいではない。なぜならこの間、賃金＝労働力の再生産費は下がる傾向を一貫して続けている。

⑤働く人々は労働力の再生産費が下がるのを甘受してきている。問題は経営において労働生産性を高める効果的な投資をしなかったからである。

⑥労働力の再生産費が下がることは、畢竟、消費需要を低下せしめることに過ぎない。まして不安を煽ったのだから消費が向上する訳がない。

⑦人事管理に関して論議をするのであれば、一九八〇年代後半からバブル崩壊までと、一九九〇年代後半からの二つについて真剣・真摯な反省が必要である。

⑧たとえば経営側はこの間年功序列批判に躍起であったが、年功序列を年齢・勤続序列に堕落させたのは一九八〇年代後半の人事管理である。

⑨一九九〇年代後半から成果主義論が花盛りだったが、成果をきちんと評価する人事管理体制に果たして変わったのであるか。

⑩成果主義論によって確かに職場で「自分中心主義」が氾濫するようになったが、お

陰で組織力を発揮するような人事管理から遠ざかったではないか。

⑪管理＝組織運営とは現実に即したダイナミックなものでなければならない。成果主義を全社員の熱い議論で導入した会社が果たしていくつあったか。

⑫制度は所詮紙切れに過ぎない。紙切れに偏向すれば社員の意識が変わると考えるような安直な人事管理が継続されてきたのではなかったのか。

⑬社員は会社思いである。会社の発展を願わぬものはいない。だから多くの職場でサービス労働という法律違反が定着するような次第になっている。

日本経団連は春闘→春討であると標榜する。おおいに賛成である。金額の問題ではない。情勢の厳しさの喧伝でお茶を濁すのではなく、労使交渉団は真剣・真摯に話し合って、苦境ならば全社一丸となれるように、社員が気分よく状況に立ち向かえるように、熱のこもった交渉をやってほしい。

2005. 2. 7（月）

No.五四五

丁寧な仕事

古い話であるが、第二次大戦中、米国テネシー州の道路沿いに三枚の看板があったそうだ。いずれにも紐でつながれた二匹のロバが描かれている。

一枚目は二匹のロバが乾草に近づこうとして焦るのだが、お互いにつながれているので反対方向へ引き合って近づけない。二枚目はつながれている事情に気付いてお互いに歩調を揃えて乾草に近づく。三枚目は乾草の山を前にして二匹が満足そうに食べている。

ところでポスターは絵だけで何の説明もない。

渡米中に偶然これを見たフランスの哲学者J・P・サルトル（1905-1980）が言ったそうだ。「ポスターを見た通行人は自分で結論を引き出す。彼が理解したときは自分で思想を作ったような気分になって半分以上それに納得させられてしまう。」

さすがはサルトルである。ポスターは連帯して労働しようという狙いであった。わが国であれば「一億一心・火の玉」とか何とかやるところであるが、広告大国、社会心理に執拗なまでの眼差しを送る米国ならではのエピソードである。今でも十分通用する、

いや、このような感覚が昨今乏しい。

まさしく、ポスターには説明も命令もないが、明確な目的があった。大概の人々は広告宣伝によって走らされるのは嫌である。まして政治的宣伝・スローガンともなれば、眉に唾して眺めるのが普通である。

いかなる目的の広告であれ、本人の意志を導く広告宣伝こそが絶対的に正しい。かくして広告宣伝資本は人々の潜在意識に対して投じるのが正しい。

商品ではなく、人は商品の中に自分を発見する。その前提として、人々は何に夢中になるかを知らねばならない。これを発見するのが宣伝マンの仕事である。いや、すべからく人は人を知らねばならない。

ところで、最近のテレビ・コマーシャルなど見ていてもコンピューター・グラフィックが多用されて、制作がラクチンになっただけに止まらず、訴求テーマ、コピーが安直で、コクのあるものが誠に少ない。コマーシャルは間違いなく時代状況を反映する。コクのない時代である。

しかし、スポンサーは巨額の広告宣伝費を投じている。この程度のコマーシャルに資本をぼんぼん投下するのは、太っ腹と言うべきか、騙されてお金をむしり取られている

と同情すべきなのであろうか。金余りかも知れない。

私はテレビにおいてはドラマ、とりわけサスペンスを好むのだが、これがまたシナリオ、演出、全体の流れがよろしくなく、少し見て寝床に潜り込むほうが多くなった。最後でも、たとえば謎解きのクライマックスで、犯人があたかもト書きのような台詞をしゃべる。ドラマにならない。

時間潰し番組の典型は、あちこちの飲食店巡りをするもの、温泉旅館巡りをするものに止めを刺す。登場する連中がおいしさの表現をするだけのボキャブラリーを持ち合わせず、日頃ろくなものを食べていないのが伝わってくるのはまあ苦笑だけれど、これらのナレーションで使われる言葉のいかにもワンパターンにして事大主義的なのには情けなくなる。いただけない。

要するに制作者のレベルが低い、誠心誠意番組を創作するという態度の片鱗すら見られない。人を見ない人に優れた作品ができるわけはない。

ＮＨＫと朝日新聞の例の政治家介入問題に関しても、他社は「泥仕合である」と嘲笑したり、ジャーナリズム全体が迷惑を被るなどと超然たる姿勢を取っているが、全体が迷惑を被ると言うのであれば、すでに問題発生しているのだから、大新聞・大テレビは

独自に精緻な取材をするべきであろう。

サスペンスの登場人物はしばしば「真実を知りたい」と語る。ＮＨＫ・朝日新聞問題はドラマではない。報道の真偽・価値を問う問題である。真実を知ろうとしないジャーナリズムとはいったい何なんだろうか。これこそ、まさしくミステリーなのである。傲慢だとすら言いたくなる。

過日、日経新聞に奈良の茶筅師の原稿があった。直径二㎝、長さ一二㎝の茶かき道具の穂先が八〇から一〇〇にも割られて、その一つひとつの先端を一〇〇分の五㎜まで削り込むそうである。一人前になるのに八年もかかるらしい。

本気だから元気が出て、元気だから丁寧な仕事ができる。いくら機械が発達してもマニュアル完備しても丁寧な仕事をしなくては宝の持ち腐れだ。

2005. 2. 14（月）

No.五四六

ゆとりなき思考

ＯＥＣＤ経済開発協力機構の学習到達度調査で、わが国の義務教育終了段階の諸君の読解力が四一ヵ国・地域中、前回二〇〇〇年調査時点八位から一四位に下がった。また二五カ国・地域調査では、小学四年生・理科の成績が前回一九九五年の五五三点から五四三点に、中学二年生・数学では五七九点から五七〇点に下がった。

というので、文部科学省大臣におかれては諮問機関・中央教育審議会へ学習指導要領の全面的見直しを命じられたそうである。いわく「世界のトップレベルの学力復活をめざし教科内容の改善充実を検討してほしい。」報道によるとこの間推進してきた「ゆとり教育」が槍玉に挙げられているらしい。

私は小中学校教育現場をつぶさには知らない。想像するに少なくとも学習指導要領をひょいちょい突付いた程度で問題解決するような按配ではあるまい。そもそも圧倒的多数の子供たちにおいて学校へ勉強に行くという態度があるのだろうか。勉強なんて嫌いなほうが主流ではないのか。

学習到達度調査なるものがどのくらい権威のあるものかももちろん知らない。学習をオリンピック並みに考えて、順位が下がった、点数が下がったという外面的な問題ばかりに戦々恐々するのはいかがなものだろうか。私は優等生が多い社会などにはあまり魅力を感じない、へそ曲がりなのであって。

優等生が増えて、彼らが社会人になれば世の中が発展するという単純明快な構造でもあるまい。各界で活躍されている皆さまは挙って優等生であったのだろうか。そもそもわが国において大学教育を受けられる方々は世界一の割合だろうが、それにして今様「大学は出たけれど」なのである。

親が、わが子の成績優秀、他者を凌駕する人物に育ってほしいと願う気持ちは理解できなくもないが、かつての自分たちの来し方を迂闊にも失念して「鳶が鷹を産む」のごとき発想になってしまってはいけない。学校へ放り込んでおけば優秀な人材になる！まさか、ところてんではあるまいし。

学校とて社会である。もちろん勉学に努めるために学校があるのだけれど、子供とて自意識を持ち、人間関係にあくせく悩み、日常生活にうんざりし、まして成長期であるからわが内部にふつふつと沸いてくる「他者」との葛藤に混沌とした時間を過ごしてい

るに違いない。

かつて受験戦争という言葉があった。点数獲得至上主義の非人間的な教育環境に心痛めていた大人はどこへ消えてしまったのか。所詮、社会は生存競争ゆえ、ひたすら点数が高くなれば安堵し、下がれば腹立たしくなるというような気風になってしまっているのだとしたら。とても詰まらない。

義務教育とは大きく見れば、子供たちがやがて大人社会へ一人前見習いとして入って来られるように最低限度の教育を施すことであろう。「知徳育」などという言葉もあった。ＯＥＣＤ調査ごときにいちいち驚天動地するなど、むしろ大人たちの知徳育状態がおおいに危惧されてならない。

ゆとり教育は無気力・無感動・犯罪の低年齢化・学級崩壊などの現象から生み出されたはずである。「知」はもちろん大事だけれど、勉強するべき立場なのだという真摯・真剣な態度を醸成しなければ本腰が入らないのは当然だ。

低学年を相手にしている先生などは、子供の肉体と精神のアンバランスな成長を支えるのに実に悪戦苦闘しておられると聞く。ゆとり教育の現場が少しもゆとりがないという話もあちらこちらで聞いている。

さて、私が見ている大人において心配しているのは、たとえば「何でも正解あり」という気風が強いこと。何でも正解ありシンドローム、マニュアル症候群、その結果は官僚主義的態度の蔓延である。成績がよかったか悪かったかよりも、この主体性なき態度のほうがよほど大問題である。

職場にせよ、周辺には数多の矛盾・問題が露呈しているけれど、本気で何とかしようとする方々がどれほどおられるであろうか。「長いものには巻かれろ」「出る杭は打たれる」。だから「じっと我慢の子」しておられるようにしか見えない。これが勉強の成果である。皮肉にも。

物事を歴史的に考える習慣が欠落している。歴史的思考が問題になるのは何も靖国問題だけではない。個人も歴史、社会も、国もすべて歴史的時点に存在するのである。間違っても「学校の塾化」になるようなアホな方向へ導かないようにしたい。「ゆとり」を持って考えてみたい。

2005.2.21（月）

No.五四七

すっとこどっこい

仙台近郊の町で講演。日本全国、いずこの町へ行っても元気はつらつとはいかないのがご時世。暮れて、ひらひら頼りない雪が舞うなか、勤めを終えた皆さんが三々五々肩をすぼめ会場のドアを開けて入ってこられる。見覚えのある光景だ。そうそう、四〇年前の工場の組合会議室を思い出した。

当時は自宅から作業着で工場へ行き、働いて、帰る。給料は安かったが、普段は着たきり雀で構わなかったから衣料費は安かったな。月に一回、仕事を終えて大阪までコンサートを聞きに出かけるときは作業着をジャケットに着替える。もちろんデートも作業着ではない。

今は皆さんマイカー族で、会場前の駐車場へ車を停め、カジュアルなスタイルであって、油の匂いが直ちに香るような雰囲気ではないが、ひさしぶりに労働者という言葉が浮かんできた。懐かしい。

一五年ほど前、この付近の町の商工会議所婦人部から講演に招かれた。テーマは「社

長の引退のさせ方」。ははん、婦人部長さん、こういう次第でしょうか。社長が店を興し、今は息子も中年で事業を守り立てているが社長が相変わらず息子の行動言動にいちいちうるさく干渉する。妻・母としてはそろそろ社長に引退させて息子が自由に商売に勤しめるようにしてあげたい。さりながら夫・社長から玩具を取り上げてしまったら、今度は妻に愚図愚図いちゃもんつける時間が増えるのじゃあるまいか。それではかなわんという意味でテーマを設定されましたか。

婦人部長さんが電話の向こうでかんらからから。「まったくそうなのよ」。講演は男子禁制、事務局男性も講演開始すると部屋から追い出され、中年以上の元気な奥様方を数十人相手に、私言いたい放題、塩分の強い食事、夜の遊ばせ方などなど危ない話で会場はおおいに盛り上がった。

婦人部長さんは当時すでに六〇歳を超えておられた。誠に元気聡明で、講演後ご自宅に招かれ、手作りの草餅をいただきお茶を振舞っていただいた。美味しかった。婦人部長さんは一七歳くらいの時、自分でオープンカーを走らせて東京へ遊びに行かれたというスーパーモダンガールであった。

その後いつの間にか音信なしになっていたが、今はお元気に活躍しておられるであろ

うか。訳知りの方に尋ねれば、いやあ大変だろう、ここらの産業はとにかく大変なんだとおっしゃる。そうだよなあ。

そんな場外話もあって、数十人相手に講演をした。土地柄か、ねちっと絡み付いてくるような視線を浴びつつ、四〇年前の青年、一五年前の中年たる我輩はやっさもっさの講演を一時間半ばかり。席立つ方なく、居眠りする方なく、突然登場したおっさんの話を熱心に聞いてくださった。感謝。

終了後、有志で近所の居酒屋訪れて歓談に花が咲いた。ひさしぶりに熱燗コップ酒を頼んだ。「熱燗の程度はいかがに？」と尋ねてくださるのが嬉しい。もちろん六〇度。昔の熱燗は六〇度、昨今熱燗は四二度だが、これ昔は人肌ちょいであったぞ。御託並べるのも酒のうちである。

景気は悪い。会社もよろしくないところが多い。しかし、これも人生じゃないか。順風満帆がラクチンに決まっているけれど、思えばバブル期にお調子に乗ってノラクラしちまったという苦い記憶もある。しんどい今こそ性根の見せどころじゃないか。シュンとしてはなるまいぜ。

やはり話はコミュニケーション劣化の事情にも及ぶ。一人ひとりは微力ではあるが、

微力が集まって会社を作り、事業を展開し、快適な社会を作ってきたのである。成果主義などと言葉だけが飛び跳ねて、責任押し付け、職場の信頼感を失わせてきた苦い側面を忘れてはならない。気炎が上がる。

モノ作りの原点、一人ひとりが自分のなすべき技を磨き、心を込めて丁寧に仕事をやる。もっと職場のコミュニケーションに腐心しなくてはいけない。組織効率は大事だけれど、上意下達、命令すれば事足れりというような雰囲気ではろくなことにはならない。意思疎通、人こそが本当の力なのだ。

ラスキンの言葉を思い出した。――architecture（建築）とbuilding（建物）は違う。実用だけのものを建築とは言わない。それは単なる建物である。建築には芸術性がなければならない。芸術だ、交渉も人付き合いも。――

春闘講演後の歓談が日本文化の在り様にまで広がった。

2005. 2. 28（月）